

すだちの生産安定に向けた再生モデルの構築

ねらい

すだちは、生産者の高齢化による労力減少、老木樹園の増加による生産性の低下等により栽培面積・生産量とも減少の一途である。主に栽培が中山間の傾斜地で人力中心の作業体系で効率が悪く、労力減少に合わせて規模縮小が進んでいる。産地の維持には、規模縮小の流れを緩やかにし、改植、樹園地の流動化、新規就農者の参入、定着を促すことが必要である。

そこで、すだちの生産安定に向けて、従来より省力的な作業性や毎年の安定着果性の確保等による再生モデルの構築を、産地と連携して取り組む。

活動地域・対象

地域：徳島市、神山町、佐那河内村
対象：すだち生産者

普及活動の目標

- ・産地と連携した省力化技術および着果安定に向けた栽培管理の確立
- ・産地と連携した放棄園再生および安定経営モデルの確立

目標に向けた活動概要

1 産地との連携

県とJA、町村とで連携して現地実証の実施を進めた。

令和5年1月 検討会にて佐那河内村、JA徳島市に
現地実証（安定着花）の提案

令和5年2月 検討会にて実証内容の検討

令和5年4月 検討会にて現地実証ほ場の選定

令和5年8月ほか 農業指導班会にて報告会、現地検討
放棄園再生について意見交換



令和5年8月8日 現地検討

2 実証ほの設置および調査の実施

(1) 安定着花管理

産地で生産されている樹を使った実証ほを設置し、生産者が取り組みやすい「せん定」「摘果」作業を選び、安定着花管理の実証を行った。

実証内容

栽培管理基準に準じたせん定・摘果を行う実証区、現地の作業が栽培管理基準に達していない状態を想定した慣行区を設定し、「せん定」「摘果」作業を実施。

令和5年4月、7月、8月 着花数、着果数調査

令和5年7月 摘果作業：実証区は、栽培管理基準の「5～10葉に1果の割合」になるように、日陰の内なり果、裾なり果まで徹底して摘果を行った。

令和6年2月～ 水挿しによる花芽判定、せん定作業

(2) 省力化技術

ドローン、自走バギー散布機によるかいよう病の体系防除の実証を実施した。

(3) 放棄園再生

生産量の維持、新たな担い手の受け皿となる園地確保を目的とした実証ほの設置に向けて、産地の関係者と意見交換を行った。

普及活動の成果

1 産地と連携した省力化技術および着果安定に向けた栽培管理の確立

(1) 県と産地の関係機関と連携した取組により、目的を共有して実証内容の検討、実証ほの設置を行うことができた。



実証ほの着花状況（佐那河内村）



省力化技術実証の状況（神山町）



(2) 近年の隔年結果傾向から慣行管理のままでは令和6年に再び裏年となる恐れがあったことから、実証と並行して現場対応が必要との意見があり、関係機関と協議し、生産者に対して情報提供を行った。

(徳島県農業技術普及連絡協議会資料より抜粋)

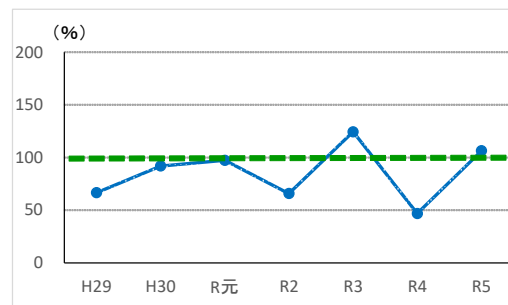
ア 着花が多い枝（特に直花）の切り返しせん定を実施し、着果数を減らし、新梢の発生を促す。切り返しせん定は、樹勢が強く上部着果の多い樹で優先的に実施する。

イ 発生した新梢に対してミカンハモグリガの防除を徹底する。

2 産地と連携した放棄園再生および安定経営モデルの確立

実証ほについて、園地選定、実証方法を産地と検討し、設置に向けた活動が進んだ。

用語説明 隔年結果：収穫量が、多い「表年」と少ない「裏年」が交互に繰り返されることで多くの果樹で発生する現象。すだちは現れにくいとされているが、近年顕著に現れている。
(右図は主産地のすだち着花状況の推移（適正着花量を100%として）)
※着花調査データ提供：JA徳島市・JA名西郡



今後の発展方向

- 各実証ほは、成果判定のため3年間継続する。
- 放棄園再生実証ほについても、産地と連携して設置を進めていく。

関係者からの声

• 新規の生産者にとっても効果がわかりやすく、導入しやすい技術としてもらいたい。(佐那河内村農業指導班会)

高度技術支援課

徳島県名西郡石井町石井字石井1660

tel : 088-674-1922